

インドネシアの華文詩作からみられる 華人の国家意識の変容

合 田 美 穂

Changing National Identity among ethnic Chinese in Indonesia :
Using Chinese Poetic Writings as the Point of Reference

GODA Miho

Abstract : This study examines the changing national identity among ethnic Chinese in Indonesia from their Chinese poetic writings. From the beginning of the 20th century to the 1950s, Chinese poems in Indonesia were influenced by the development of poetry in China. The identity of being overseas Chinese was strong, reflected in Chinese poems composed by ethnic Chinese in Indonesia. With the ban of dual nationality in 1955, most ethnic Chinese chose Indonesian nationality and stayed in the country they lived. From that time onwards, the Chinese poems by ethnic Chinese showed a sense of local identity gradually, describing more about Indonesian society and the life of the common folks. After the anti-Chinese movements and the establishment of a policy to develop Indonesia into a multi-racial society, Chinese poems by ethnic Chinese are imbued with a sense of belonging and the willingness of the Chinese to coexist in peace with other ethnic groups to develop Indonesia.

要約：本研究は、インドネシア華人の詩作からみられる華人の国家意識の変容について考察したものである。20世紀初期から1950年代にかけて、インドネシアの華文詩は、この中国の詩歌の発展の影響を受けて、大きな成長を遂げた。当時の華文詩の中には、華僑としてのアイデンティティが反映された作品が多く詠まれた。1955年の二重国籍禁止協定によって、多くのインドネシア華人はインドネシア国籍を選択し、居住国にとどまる道を選んだ。この時期以降に詠まれた華文詩は、インドネシア社会および現地の大衆の生活に根ざしたものが増加しており、居住国を永住の地として選択した華人による詩作には、現地意識の高まりが見られるようになっている。そして、いくつかの排華暴動を経て、多民族共生社会の実現が国家の目標となった現在、華人の詩作も、華人とインドネシア人が共生し、手を取り合って新しいインドネシアを建設していくことを願ったものや、インドネシアに対する帰属意識を反映したものに変わってきている。

1. はじめに

インドネシアの華人口は5百～6百万人と言われており、その数はシンガポールの総人口を上回るほどの大きな民族グループである。しかしながら、インドネシア全体の中では、華人は全人口の約3%を占める

にとどまるマイノリティである¹⁾。インドネシアでは、植民地統治時期から何度も排華事件が発生していたが、そのような環境に身をおきながらも、対華人政策が厳しいものになるインドネシア独立以前は、華人は中国語教育を發展させ、華人文化を發揚させていった。

中国における「五四運動」²⁾以降の新文化運動は、詩

歌が中心となっており、中国の新しい詩歌は、1917 年から 1949 年の新中国の成立まで、萌芽、成長、発展の道を歩んできた。新しい詩歌は、欧米に留学した中国人詩人の努力の下で、一時期は欧米の影響を受けた作品が一世を風靡したこともあったが、その後は、次第に現地化の様相を見せてきた。インドネシアの華文詩も、この中国の詩歌の発展の影響を受け、1950 年代までに大きな成長を遂げた。特に、第二次世界大戦前後は、インドネシア華文文学萌芽の時期ともいえ、またそれが最も発展した時期でもあるといえる。当時の華文詩の中には、華僑としてのアイデンティティが反映された作品が多く詠まれた³⁾。

インドネシア華人詩人たちは、その後、苦難の道を歩むことになるのである。1949 年のインドネシアの独立以降、スカルノ政権下において、華人を取り巻く国内の状況は一変することになった。インドネシアでは、華人人口は人口の約 3% でしかないが、華人はインドネシアの経済発展には非常に重要な役割を果たし、国家に大きな影響をおよぼすカギとなっているとみなされてきた。スカルノ、スハルト両大統領は、常に華人有力者からの大きな支持を得て、それを国家の発展や政権の維持に十分利用しながら、華人と密接な関係を築いてきた⁴⁾。その一方では、華文学校や中国語使用の制限などの排華政策を強めていったのである。特に、1966 年に反共運動が排華暴動に転じた際に、当時のスカルノ大統領から政権を奪取したスハルトは、更なる排華政策を強め、華人は厳しい排華政策の下で、政府からの圧迫を受けるようになった。

1955 年の二重国籍禁止協定によって、多くのインドネシア華人はインドネシア国籍を選択し、居住国にとどまる道を選ぶこととなった。この時期以降に詠まれた華文詩は、インドネシア社会および現地の大衆の生活に根ざしたものが増加しており、居住国を永住の地として選択した華人による詩作には、現地意識の高まりが見られるようになっていった。

1998 年 5 月、経済危機を発端とした反政府デモが、さらには排華暴動が発生した。同年、スハルト政権が崩壊してからは、インドネシア華人を取り巻く政策は大きな転換を見せている。過去の幾度にもおよぶ排華暴動を省みて、ワヒド大統領以降の施政者は、排華的な法令を廃除し、多元的な民族融和と国家の建設を目指すようになっていく。インドネシア政府による対華人政策に大きな転換が見られてから 10 年あまりが経過した現在、ユドヨノ大統領は、今後、インドネシアにおいて、華人を含めたマイノリティ民族に対する差別

や偏見を二度と起こさないということをあらためて表明し、民族融和の社会の実現を国家の目標においている⁵⁾。また、近年、華人の詩作も、華人とインドネシア人が共生し、手を取り合って新しいインドネシアを建設していくことを願ったものや、インドネシアに対する愛国主義を反映したものに姿容を見せている。

近年、筆者は、インドネシアにおける華人組織について調査をする過程で、幾度となく現地の華人による文学作品や詩を目にする機会があった。政治的な要因によって華文が弾圧されていた時期が長かったにもかかわらず、現地の華人による詩作は、途切れることなく継続されていた。筆者は、華人の国家意識の姿容という視点から、それについての考察を深めたいと思うように至った。本研究は、インドネシアの華文詩作からみられる華人の民族意識の姿容についての考察したものである。

本研究では、華人を取り巻く時代背景についての理解を深めるために、書籍、論文、ウェブ上での資料などを参照にした。また、シンガポールの華文作家で詩人でもある寒川氏より、インドネシア華人による詩作を紹介してもらうだけでなく、その解説および助言も多くもらうことができた。なお、文中に登場する華人作家については、情報が得られた範囲で、注釈に記載をした。

2. 1950 年代以前の華文詩作からみられる 中国国家アイデンティティ

(1) 華人を取り巻く時代背景

インドネシアにおける華人の歴史は長く、16 世紀には既に大規模の華人居住地が存在していた⁶⁾。華人人口が急増したのは、19 世紀末である。華南地域からの移民が大量に移住し、ジャワを中心にして、インドネシア各地に純血の華人社会を築いていった。彼らは、中国語（当時は主に方言）、服装、習俗をそのまま持ち込んでいた。その子女は、父親の故郷の華南地方に一時的に滞在し、教育を受けることもあった。華人居住地には、方言による私塾や学校、地縁・血縁組織である華人会館も次々と設立された。中国とのつながりは密接であり、中国語の出版物なども随時インドネシアに輸入されていた。当時、当局の華人に対する規制は強くはなく、華人移民が各地に建設した純血の華人社会の中で、典型的な華人文化が継承されていった⁷⁾。

19 世紀末に誕生した純血の華人社会では、方言に

基づいた住み分けや学校の設立などが行われていた。その後、中国における辛亥革命の影響によって、インドネシア各地に居住する華人たちは、方言グループや出身地による帰属意識を超越した、中華民族としてのアイデンティティを強めるようになっていった。そして、方言にとらわれない華人の組織である中華会館を設立し、その後、方言の壁を越えた華文学校を次々と設立した。

1920年代、中華ナショナリズム思想の普及によって、インドネシア各大都市には、北京語を教学用語とする華文学校が急増し、華字紙も発行された。例えば、バタヴィアの『華鋒報』などである。『華鋒報』はしばらくして廃刊となったが、続いて『新報』や『天声日報』が刊行された。中でも、『新報』は、中国の五四運動の影響を受けた新しい作風の文芸作品を数多く掲載していた。こういった華字紙は、インドネシア華文文学の発展に大きな作用をもたらした⁸⁾。

(2) 1950年代以前の華文詩歌からみられる中国国家アイデンティティ

1920年代から1930年代初頭にかけては、インドネシアの華文文学の萌芽の時期でもあり、それが発展した時期でもあった。インドネシア華文文学は、中国の現代文学の現実主義的な文学理論を踏襲しており、積極的に現実を反映していると言われている。当時の伝統的な華人の国家アイデンティティは中国であった。彼らは中国を祖国とみなしており、現地に対する帰属意識はさほど強いものではなかった。また、現地にて刊行物の編集者や文教活動に携わる作家は、自らをインドネシアの「短期居住者」とみなしており、彼らの作品にもまた、中国への帰属意識が反映されていた。第2次大戦が勃発し、華文文学も表面的には停頓状態となったが、その時期シンガポールから避難してきたシンガポールの著名文化人たちが、インドネシア華文文学の発展のために、人材を育成した⁹⁾。

戦後、インドネシアは独立し、建国の路を歩むことになった。同時に、華文文学や詩作も、華文学校の復興と華文刊行物の盛行とともに発展していった。1950年代中期になると、華字紙の中に文芸欄が次々に設定され、文芸欄は常に多くの投稿によって賑わいを見せていた。インドネシアにおけるこの時期の華文文学や詩作は、東南アジアの他地域における華文文学と同様に、常に中国現代文学からの影響を深く受けていた。独立後も、多くのインドネシア華人はなおも、自らの立場をインドネシアの「短期居住者」と位置づけ、中

国を祖国とみなしていた。1950年代のインドネシア華人による詩作の内容の大部分は、1949年に成立した新中国の社会を詠んだものであり、詩には新中国に対する思いが込められていた。『僑歌三部曲』で知られる著名なインドネシア華人作家の黄東平¹⁰⁾は、当時、詩作に非常に熱心であった。以下は、黄東平の一首である¹¹⁾：

なぜ 南洋の椰子の木は
海の島や荒れた山に広がっているのだろう？
なぜなら 彼らは海水が湧き出る所なら
生きていくことができるから！

なぜ 海外の椰子の木は
密集し 力強く 壮健なんだろう？
なぜなら 彼らは試練に耐えることができるから
これまで 炎天や長雨に耐えてこられたから！

なぜ 崖の上の椰子の木は
海に向かって身を乗り出しているのだろう？
なぜなら その立派な「唐山」に
彼らの心が向いているから！

(日本語訳：筆者)

この詩は、南洋華人を椰子の木に、中国を「唐山」と形容し、南洋に身を置きながら、心は常に中国を向いているという当時の華人の心理状態を詠んでいる。この詩からは、華人の国家アイデンティティは、居住地であるインドネシアではなく、中国であるということが明確に読み取れる。

黄東平の詩はすべて、『僑風』および『僑風二集』に収録されているが、それらの多くが、中国とインドネシア両国の人々の伝統的な価値観について詠まれたもので、また両者の友好関係も強調したものであった。その一方で、現地での生活を反映した詩作もあり、社会情勢や社会問題が取り上げられることもあった。以下は、その中の「橡樹小曲」の2節である¹²⁾：

流れる、どんどん流れる
ゴムの木の乾いた表皮から．．．
ああ——それは涙だ！
流れ尽きることの悲しみだ！
数百年の辛酸を心の中に秘め
屈辱の歳月が流れつづけている！

流れる、どンドン流れる
 ゴムの木の渴いた表皮から、. . .
 ああ——それは汗だ！
 人々の背から滴り落ちたものだ！
 焼け焦げた肉から 搾り取られて
 ゴムも人の皮膚も同じように枯渇している！

(日本語訳：筆者)

寒川氏によると、黄東平の詩歌は、テーマは明朗であり、韻律を重んじることを徹底しており、語句は簡潔であるけれども奥が深く、生命感にあふれているものが多いという。この「橡樹小曲」も同様である。この詩は全部で 5 節 31 行に及んでおり、社会の底辺にいる人たちの、策略者に対する憤怒と痛恨の感情が表現されている。黄東平は、弾圧され搾取された現地の貧苦にあえぐ人々をゴムの木に例えて、インドネシアの現状に対する不満を訴えた。黄東平はまた、「背光的一面」のなかでも、ジャカルタの街角に見られる貧窮、落伍者、不公平を描いた。

1956 年から 1964 年にかけて、黄東平は北京、上海、広州などの中国の 12 の大都市に滞在し、20 あまりにおよぶ全国レベルおよび地方レベルの文芸刊物に、感情的で熱意に溢れた大量の詩歌を投稿した。黄東平は自らを華僑とみなして、中国を心の拠り所とするような内容の詩も詠んだ。例えば、「祖国が強くなることを願う」、「頼れるのは祖国のみ」といった海外華僑の祖国に対する思いを、彼は詩の中で表現した¹³⁾。

犁青¹⁴⁾は、黄東平と同じく、この時期を代表する華人詩人である。多くの作家と同様に、彼らは自らの居住国であるインドネシアを祖国と考えておらず、新中国にいつか戻れるという希望を抱いていた。しかしながら、彼らは、決して中国や華人だけに目を向けていたのではなく、底辺の生活を強いられている原住民にも関心を抱いていた。寒川氏によると、黄東平と犁青の作品は、居住国を見つめ、現実主義をとっていたが、それでも彼らにとっては、インドネシアは祖国になりえることはなかったという。

犁青の詩集である『印度尼西亞的笑声和淚影』の中には、華僑の立場で書かれた作品を指す「僑民文学」といわれる作品がある。例えば「願望」、「遲昇の五星紅旗」、「独立大厦和淡萬沙里別墅」、「他離開了這一熟悉的方地方」などである。以下の 1957 年に発表された詩もそのうちの 1 つである¹⁵⁾：

1 人の青年が旅行鞆を持ち上げた
 彼は長く住み慣れた場所を後にしようとしている
 見送りの人に何度も何度も手を振った
 彼は異郷で生まれた息子に別れのキスをした
 彼は校門に別れを告げて前に向かって疾走した
 しかし彼はまた後ろ髪を惹かれて振り返った

彼が初めて来た時は、松の木はまだ小さかった
 今では松涛がさわやかに呼びかける
 彼が初めて来た時は、果樹の苗が植えられたばかりだった
 今では季節の果物がたわわに実っている

彼が初めて来た時は、建物はボロボロで雨漏り状態だった
 今では装飾が美しい新しい建物だ
 彼が初めて来た時は、教室は暗く机も足りなかった
 今では広く明るい部屋に机や椅子がきれいに輝いている

もともとは難民収容所であった仕切り部屋が
 今では歌舞の舞台になり、映画が上映される講堂
 になっている
 もともとは雑草や茨が生えた小部屋が
 今では図書室になり、科学実験室になっている

以前の職員室では
 少数の教師が授業の準備や話をしており
 西側の教室から出てくる
 子どもたちには数十人だけだった
 今では教師の数は百人にのぼり
 数千人の子どもたちが飛び跳ねていてにぎやかだ
 無数の学生が卒業していき
 祖国や離島の町で仕事をしている

彼は 1 度ここを離れることを考えた
 だが校長が危篤となり、離れられなかった
 彼は 2 度目にここを離れることを考えた
 だが校舎が拡張されることになり、できなかった
 祖国の母はずっと彼を呼び続けた
 彼は 3 度目に学校を離れる決心をした
 さようなら！第 2 の故郷
 さようなら！親愛なる教師たちよ

(日本語訳：筆者)

この詩からは、中国とインドネシアという2つの祖国に挟まれるインドネシア華人の苦悩を読み取ることができる。この詩からは、「居住地では自分は必要とされている。居住地で生まれた子どももいる。しかし、最終的に祖国である中国に戻ることを選択した」という、当時のインドネシア華人に多く見られた苦悩とともに、作者の中国への強い国家意識が反映されている。

犁青は1956年に、居住国のインドネシアにおいて、数百首の詩を詠んだ。そして、1959年に病気になる、中国に戻って療養した。犁青はインドネシアに残った友人に、中国語の書籍、原稿、絵巻物、手紙などの保管を託していた。1965年、インドネシアでは排華運動が起こり、華文学校は閉鎖、華人組織は解散、華字紙は停刊となった。政府の厳しい排華政策の下で、友人は犁青から託された中国語による書籍や原稿をやむなく焼却せざるを得なくなった。

犁青による『印度尼西亞的笑声和淚影』は、1957年から1959年までの2年間の作品を集めた詩集である。犁青の作品のタイトルは多様であり、『美しい印度尼西亞』、『給詩之島：峇厘』、『紅緑閃閃の顔色湖』、『躍動的火山』などは、インドネシアの風景を描写したものである。また、華僑移民の辛酸の歴史を訴えた詩集である『雅加達の血と火』および『赤道地帯の逆流』では、1959年末、中国とインドネシアの友好関係が崩れ、インドネシア政府が排華政策を実施したことによって、華僑たちがやむなくインドネシアを離れて祖国に戻らざるを得なくなったという史実を詠んでいる¹⁶⁾。

3. 1960年代以降の華文詩作からみられる現地意識

(1) 華人を取り巻く時代背景

独立後のインドネシアでは、大統領の権限が非常に大きく、大統領主導の民族政策によって、華人が大きな影響を受けることとなった¹⁷⁾。1945年から1965年のスカルノ大統領執政期、そして、1966年から1998年のスハルト大統領執政期において、排華的な要素がある大統領令14号(1967年制定)などを通して、積極的に華人の同化政策が推し進められてきた¹⁸⁾。

例えば、1955年、中国とインドネシアの間では、二重国籍を禁止する国籍協定が締結され、多くのインドネシア華人は国籍の選択を余儀なくされることとなった。1966年以降、スハルト大統領は、華文学校、

華人組織、華文の禁止を徹底した。全インドネシアの629校の華文学校が閉校され、公的な場所における中国語および漢字の使用や、中国文化を発揚することが禁止され、中国語の看板の掲示も禁止された。中国語による刊行物の出版と輸入、および、中国語のテープ、ビデオ、映画の輸入も禁止となった。製品の使用説明書でさえも、中国語を使用することができなくなった。1967年には、14号大統領法令の制定によって、華人が公共の場所において宗教儀式や伝統行事を開催することも禁止されることとなった。政府は、華人にはインドネシア名を使用することや、イスラム教を信仰することを奨励した。

しかしながら、どの地域においても原住民と華人がこの政策によって分化していたわけではなかった。一部の地域では、原住民と華人はかねてから協調的な関係を築いていた。例えば、ジャワ島のバンドンでは、早い段階から、華人企業家が無償で地域の建設工事を行ったり、原住民の従業員の福利厚生に力を入れたりしており、原住民と華人は良好な関係を築いていた¹⁹⁾。地方における華人と原住民のこういった良好な関係は、この時期の華文詩作にも強く反映されることとなった。

(2) 華文詩作からみられる現地意識の高まりとインドネシアへの帰属意識

1955年の二重国籍禁止協定によって、多くのインドネシア華人は国籍の選択を余儀なくされることとなり、それによって、多くの華人は中国に対する強い感情を持ちながらも、居住国に根ざした生活を送ることとなった。この時期以降の華文の詩作には、インドネシア社会および現地の大衆の生活に根ざしたものが増加しており、はるか遠くの中国を祖国とみなし、新中国を賞賛するような作品は次第に少なくなっていった。居住国であるインドネシアへの感情や関心がより高まっていくこの時期より、インドネシア華人作家の作品は、華人とインドネシア人が共生し、手を取り合って新しいインドネシアを建設していく姿を描いたものや、インドネシアに対する愛国主義を反映したものなど、現地意識の高まりが感じられる作品へと、徐々に変容していったのである。

1960年代中期以降、上述の排華政策によって、インドネシアの華文文学は逆境に晒されることになったが、インドネシアの華文文学や詩歌の創作は完全に消滅したわけではなく、創作意欲の強い一部の華人によって、さまざまな方法で地道な創作活動が行われた。

そして、それらの作品は、国内外で発表されていた。

明芳²⁰⁾の「旧書攤前」は、華文の書物が販売禁止になったことに対するやるせない感情や、華文の出版物をあちこちで見かけることができた時代を懐かしむ気持ちを詠んだものである。寒川氏によると、華文が禁止されていた年代、華文の書籍や雑誌は何度もコピーされて、友人知人の間をぐるぐる回っていたという。この「旧書攤前」は、中華街の古い書籍の屋台で、華文の書物、とりわけ大好きな本が並んでいるのを目にした情景を詠んでおり、作家の若い頃の習作を屋台に見つけた時の喜びの気持ちが伝わってくる作品であると寒川氏は述べている²¹⁾：

ゆっくりと

人通りがにぎやかな芝蘭街^(*)を歩いていて
うらぶれた古い書籍を売る露天に足を止めた

過ぎ去った歳月を
追悼する

露天の書籍の中に
見かけたような気がした
厳冬の氷の洞窟の中に埋められた熱い心を

略奪されて生き残ったバンドン^(**)の子どもを
軽く撫でてあげる

熱い涙をいっぱいためて
咀嚼する
失った後に得た滋味を

(日本語訳：筆者)

(*) ジャカルタの中華街にある通りの名称

(**) インドネシアの地名

明芳の詩集『相約在山城』において、序章を記した中国の朱文斌教授は、「明芳は一般人とは異なる特質を備えており、それは生活全般を把握し、独得の慧眼で観察を行っている。現実の土壌と歴史の泥の中から、そこに込められた他の意味を咀嚼している」と明芳の作品を賞賛している。明芳の「保護森林」の一首は、自然保護を呼びかけたものであり、現代人がむやみに森林を伐採し、生態系のバランスを破壊することを戒めたものである。排華事件を詠んだ「火劫之後」は、淡白な描写ではあるが、そこには作者の深く沈んだ痛みが込められている。

寒川氏は、1970年代初期に、シンガポールの華文文芸誌である『島嶼季刊』の中で、「印尼華裔的詩歌」と題して、ジャカルタ短期滞在中に目にした『印度尼西亜日報』²²⁾に掲載された華文詩歌作品についての感想を、以下のように述べている²³⁾：

当時のインドネシアでは、中国語による読み物の輸入や販売が全面的に禁止されており、既に市場に出回っているものの中からは、インドネシア華人作家による著作集を探すことはできなかった。このような状況の中であっても、『印度尼西亜日報』に掲載されているインドネシア華文詩作から、作家の現地意識やインドネシアへの感情を垣間見ることができた。

寒川氏は、インドネシアを生活の場として祖国とする意識形態が顕著に見られる当時の作品として、作者不明の『假如我是』を取り上げている²⁴⁾：

もし 私が海燕なら

海の荒波をものともせず、はるか遠くまで飛んで
行くだろう

暴風雨の襲撃にも恐れず

明るく輝く方向———民族英雄塔 に向かうだ
ろう

果てのない太平洋を横切り

長い間離れていた母の懐へ戻るだろう

私の祖国———愛するインドネシア

長い時間離れていた放蕩息子の思いや恋しい気持ち
を伝えたい

永遠に離れない！

もし私が鷹なら

スメル山^(*)———私の愛する故郷から

インドネシア中を広く飛び回るだろう

沙横^(**)からマルク^(***)まで、南から北まで

祖国の広い晴れ渡る空を

私の2つの強い金色の翼で

祖国の自由な大地を守ると決心して

人びとの安全で豊かな暮らしを守り

五大陸と七つの大洋を見張り

強大な祖国と共に存亡することを誓う！

(日本語訳：筆者)

(*) インドネシアの山名

(**) インドネシアのバンカ島南部にある地名

(※3) インドネシアの地名

この詩の作者は、自らを海燕に例えて、「大きな波風を恐れず、祖国であるインドネシアの懐に一身に飛び込みたい」という気持ちを詩に詠んでいる。そこからは、作者の強い現地意識と、インドネシアへの国家アイデンティティを感じる事ができる。

すでに他界している華人詩人、ロミオ鄭²⁵⁾および馮世才²⁶⁾は、当時、当局によって華文の出版が禁止されていた中で、押し込められた感情を文章によって表出していた。前者は詩集『躍起』の中のあとがきの中で、「椰子の殻の底で生活すること／その狭さと窮屈さは言うまでもない」という心情を表した。後者は、自身の作品の中で、華文に触れることのできないどうしようもない気持ちを詠んだ²⁷⁾。

その一方で、彼らの作品からは、一世代前の華人とは異なり、生まれ育ったインドネシアに対する帰属意識が、顕著に見られるようになっていた。第二次大戦以降、インドネシアは独立し、インドネシア国民による独立国家を建設することを目指した。インドネシア建国の父と言われるスカルノ大統領は、1945年6月1日に「パンチャシラ」²⁸⁾と呼ばれる建国の五大原則を発表した。その中の1つに、「インドネシアの統一」がある。スカルノ大統領は当時、他民族を含めたインドネシア人が団結し、1つの民族となることを望んだ。当時の華人の著作では、その影響をうけて、居住地に対する感情や思いが表現されるようになっていた。

例えば、ロミオ鄭は、「牧歌短笛」の中で、ペカロンガン、スマラン、ジョグジャカルタ、ブンガワンソロ、ボロブドールなどインドネシアの7つの景勝地を取り上げ、土地と国家への愛情を示している。ロミオ鄭は、以下の詩「馬車」においても、ジョグジャカルタの小さな町の馬車を、生き活きと描いた²⁹⁾：

ジョグジャカルタの古い道
様々な馬車が
揺られている

緑の野に朝日が降り注ぎ
優しく語り掛ける風は絵画のようだ
広い胸のうちをこの上なく引き伸ばしてみる

どれくらいの道や険しい森林を越えてきたら
うか

どれくらいの堆石や砂漠を歩いてきたらうか

魂と気持ちが高ぶる
山から山へと漂いながら
足腰はなおも軽快でしっかりしている
高みによってゆったりくつろぐ
水しぶきの速い怒涛の共鳴とともに

(日本語訳：筆者)

寒川氏は、ロミオ鄭の詩「ジョグジャカルタの馬車」は、中国の近代詩人である臧克家のよく知られた「老馬」のような生活の辛酸をなめたようなものではなく、ジャワ族の楽天的な性格と密接に関わるものである」と評している。ロミオ鄭は、美しく素朴な生活風景を描いており、寒川氏はその詩に、ジャワの現実の水彩画のような印象を受けたという。ロミオ鄭と同様に、馮世才の詩歌の題材も多様化している。馮世才は、詩集『秋実』および『遥寄』に収録された作品の中に、地方の風情を描いたものを集めている。そのうちの1つの詩が「這是雅加達好」である³⁰⁾：

旅立ちの前
私の心は既に遠くにあった
異郷の美しい風景を見ていた
異国の情緒を感じていた
異郷にいて
ジャカルタを懐かしんでいた

私はその暑さに慣れている
その汚さを受け入れている
交通渋滞、やんちゃな中高生
生活は尖った車輪で
褐色でまだらのある凶暴な馬のよう

ジャカルタを心地よく感じている私
ジャカルタの人たちと長く離れることなんて
想像もできない

(日本語訳：筆者)

華人詩人である顧長福³¹⁾は、当時、3年の時間をかけて、『顧長福詩集1』および『顧長福詩集2』を完成した。詩の評論家である台湾の落蒂氏は、顧長福の詩について、「人生における悟りがもっとも深い作品である」と評している。寒川氏も、「顧長福がこの作品を創作した時期は、既に年を重ねて、人生経験も豊富

になっていた時期である。彼の古詩への偏愛、詩中の言葉は他の人のものとは異なる深い風采を呈している」と評している³²⁾。

『顧長福詩集 1』の中の「英雄塔」は、スラバヤの巍峨と呼ばれる場所の壮観さが描写され、現地にある烈士の英雄塔について詠まれたものでもある。この英雄塔は、インドネシア人民が祖国の領土を守るために、竹槍だけで勇敢に敵に向かい犠牲になったという英雄伝説によって作られたものである。別の一首「光輝前程」は、抗日戦争や抗植民地戦争の際に、各民族がスラバヤ城をわが身をもって守ったという史実に基づいて詠まれたものである。この 2 首からも、民族を分け隔てることのない、作者のインドネシアへの郷土愛が表現されているといえる³³⁾。

(3) 詩作を通して表現する 1998 年の排華事件に対する感情

インドネシア独立後、インドネシア各地では、大小の規模の排華事件が発生していた。中でも 1965 年から 1966 年にかけての排華暴動と、1998 年の排華暴動では、多くの死者と負傷者が生じ、これまでの排華暴動の中で最も深刻な事態を招く結果となった³⁴⁾。記憶にも新しい 1998 年 5 月のインドネシアにおける排華暴動は、多くのインドネシア華人詩人にも辛い記憶を植えつけることになった。葉竹³⁵⁾の詩の中には、それをよく表現しているものがある。中でも「烏雨傘」の第 2 段には、華人が受けた深い傷が描かれている³⁶⁾：

傘の中

文明の野火が BBQ パーティーの中に見える
焼き尽くされても手足は踊る
最後には私の一枚の薄い黄色の皮膚まで
奪われ焼かれてサテー^(*)にされてしまうことだろ
う
辛さのない香ばしさが
既に傘の所有者の手に握られている
一家が崩壊して
その処罰は他人にゆだねられるのだ

(日本語訳：筆者)

(*)インドネシア料理を代表する料理の 1 つ

莎萍³⁷⁾は、1999 年以降、毎年 5 月になると、1998 年の排華暴動の被害者への哀悼の詩を詠んでいる。例えば、1999 年の「這里没有春天」、2000 年の「野草」、2001 年の「是誰」、2002 年の「騷乱」、2003 年の「他

一定会回来」、2004 年の「侂子手」、2005 年の「五月的血衣」、2007 年の「九年了」、2009 年の「血的傷口」、2010 年の「不必急」はすべて 1998 年のインドネシア排華暴動を詠んだものであった。また、「焼你踩你鋤你揪你」や、全く抵抗しなかった人たちを描写した「野草」は、罪もない華人の市民が受けた悲劇について詠まれたものである。

2005 年に詠まれた「五月的血衣」の 4 節 16 行はすべて、8 句からなる「五月的 . . .」で始まっている。その詩には、「血まみれの衣服は肩から羽織られたまま / 大地は垣や塀の残骸を残したまま / 空は血腥い焦げた匂いを漂わせたまま」と、当時のインドネシアの広範囲で起こった華人に対する残虐行為がそのまま詠まれていた。寒川氏は特に、2007 年の「九年了」の詩が印象に残ったとしている (以下)³⁸⁾：

歴史は後戻りすることはない
しかし絶対に忘れない
その右手には事実がつかまれ
その左手には時期が記されている

いつか物事の事実が明らかになる日が来る
歴史は無言ではなく ごまかせるものではないの
だ

(日本語訳：筆者)

女性詩人の茜茜麗亞³⁹⁾もまた、1998 年の排華事件について、「夢魘」と題して、以下の詩を詠んでいる⁴⁰⁾：

予告もなしに
このように襲来してきた

分けの分からないうちに戦闘場になり
夢でうなされている中 血まみれの服が
爆発した

(日本語訳：筆者)

上の詩は全部で 3 節 11 行からなる詩の一部である。詩の末節では、「悪夢は心のもっと深くもっと暗い海に沈む」という言葉で締めくくられている。また、彼女の別の詩「哭泣的印度尼西亚」の最初の 2 節の中では、「心が刀で絶ち切れ / 熱い涙があふれている」と詠まれている。また、この詩の別の節において、どうしようもない深い悲しみが以下のように詠まれている⁴¹⁾：

空の色が変わった時
 火炎の霧がまとわりつく

貴女の顔の輪郭がだんだんと
 ぼやけてくる

涙が流れて血の海になった時
 悲痛に沈んだ音のない声が
 目の縁に
 乾いて固まる

(日本語訳：筆者)

2009年、「インドネシア華文作家協会」の成立10周年記念式典が開催された。中国廈門大学中文系の蘇永延教授は、その記念スピーチで、1998年5月の排華事件に対する華人の感情を表した作品について紹介した。具体的には、林沁の「驚険」、蓮花の「恐怖的日子」、松華⁴²⁾の「幸而還有它」、雯飛の「烏雲又漂来」などの作品が、暴動の悲惨さや辛さ、生き残った者の気持ちを表している作品であるとして紹介されていた。上述の莎萍の「九年了」の一節も同時に紹介された。

蘇教授は、このスピーチのなかで、この暴動を通して描かれた華人にまつわる人間関係についても言及している。小心の「真正的愛」は、排華暴動の最中、タクシー運転手(原住民)が、暴徒に迫害され追われている若夫婦(華人)から乳児を預かり、両親のかわりにきちんとその子どもの面倒をみて、2年後に華人夫婦の手元に届けたという内容であり、心温まるストーリーとして紹介された。

同時に紹介されたのは、曉星の「功敗垂成」である。ある老華人は、排華暴動によって家も何もかもを失い、中国の親戚の住所が記された唯一のメモも焼失した。老人は、かすかな住所の記憶を頼りに、代筆人に手紙の代筆と投函を依頼するが、住所があやふやなために、中国には届くわけもない。代筆人は、老人の気持ちを思い遣って、中国の親戚に成りすまして返信をするが、結局、それもうまくいかなかった。祖国である中国に深い感情を持つ老華人の、唯一の中国とのつながりが、完全に焼失してしまったという悲しいストーリーではあるが、同胞を助けたいという代筆人の思い遣りの心が伝わってくる作品でもある。

莫名其妙の「修車」は、自動車修理の知識のない青年(原住民)と、自動車の所有者である婦人(華人)との、暴動直後の交流を描いた詩である。パンクした自

動車を見かねて一生懸命に修理するものの、結局修理することができなかった青年に対して、婦人は「車の修復はできないけれども、友情が修復できるということが分かったわ」と言って、修理代を支払うという内容である。これらの作品を通して、作者たちは、原住民と華人の友好の大切さ、人に対する思いやりの大切さを訴えたのである⁴³⁾。

4. 近年の華文詩作に見られる 多民族共生の意識

(1) 華人を取り巻く時代背景

1998年のスハルト退陣以降の大統領たちは、華人に対する従来の差別的な法令を排除するように努めた。1998年就任のハビビ大統領は、従来の華文の使用や中国伝統文化の発揚を禁止する政策を廃除した⁴⁴⁾。1999年のワヒド大統領就任以降、公的な場での華人の伝統行事の開催、華人の宗教や華人の慣習に基づいた活動に対する制限は撤廃された。華文学校の設立および華字紙の発行の禁止も解除され、更には、華文教育の科目を、小中学校、私立学校、言語学校および全国の大学の中文学科に開講することが認可された。中国語名の使用も承認された^{45、46)}。ワヒド大統領は、「華人は居住国に忠誠心を持たなければならないが、中国語を放棄すべきではなく、また中国文化を継承する権利を持っている」と述べた⁴⁷⁾。その後のメガワティ大統領およびユドヨノ大統領は、多元的な民族融和社会の建設に向けて、更に積極的な改革を実施している。特に、2003年には、メガワティ大統領によって、華人の最も重要な伝統行事である「旧正月」が国民の祝日として制定された^{48、49)}。

2006年8月9日には、ユドヨノ大統領によって、新国籍法が施行され、同時に旧国籍法が廃除された。旧国籍法には、少数民族(非原住民)、性別などに対する差別的な条項が含まれたものであった⁵⁰⁾。新国籍法は、全ての民族に同等の権利と義務が与えられたものである。新国籍法の施行によって、インドネシア華人が、別種の国民であるとしてラベリングされ、二等公民としてみなされることは、基本的になくなったのである⁵¹⁾。こういった華人に対する政策の変化だけをみても、華人が法律的にも文化的にも、原住民と同様の権利が与えられるようになったとも言えるのである⁵²⁾。

そういった政策を実施したのは、華人政治家ではなく、原住民の政治家であるということは注目するに値

する。マジョリティである原住民の政治家が華人を尊重することは、その国でマイノリティの文化が承認されているかどうかの1つの指標になっていると言えるからである⁵³⁾。ユドヨノ大統領は、2011年に、華人の旧正月行事に参加した際に、2年以内に、国内の華人への差別問題を徹底的に改善すると表明した⁵⁴⁾。このインドネシアの対華人政策の転換によって、原住民と華人との融和の促進が期待されるといえる。実際に、その後、2004年12月にインド洋地震による津波発生による更なる経済危機に際しても、大きな排華事件や民族衝突には至っていない⁵⁵⁾。

インドネシアの華人社会では、排華的な法律の廃止によって、華文や華人に関する組織が数多く出現している。華文作家も、文学組織を設立し始めた。例えば、「インドネシア華文作家協会」およびその各支部、「バンドン・インドネシア華人作家協会」などである。また、「文芸ワークショップ」や「アセアン華文文芸キャンプ」なども企画されるようになった。1995年から2006年にかけての、インドネシア華人作家による出版物は、単行本だけで140冊にもなっている⁵⁶⁾。

多くの華字紙も、次々と出現し、華字紙の『印尼日報』、『和平日報』、『千島日報』などや、定期刊行物である『印尼與東協』、『新聲月刊』、『印華之聲』も刊行されるようになってきている。しかしながら、華字紙や華文定期刊行物の普及率はさほど高くないのが現状である。財政面の問題から、すでに『新生日報』は停刊となっており、現段階では、インドネシアの十大華字紙の総販売量は5万部にも満たない状況である。それは、30年以上にもおよぶ排華政策で、華文を読める人口が激減したということも大きな要因であると考えられる。

(2) 近年の華文詩作に見られる多民族共生の意識

寒川氏は、「東南アジアの華文新文学を研究する学者は、その地域の華文作家が、鮮明な民族性と現地性を有し、また、鮮明な現実主義的な良知と精神を一樣に持ち合わせることに気づくだろう」と述べている。インドネシア華文詩人は、常に作品の中にインドネシアの社会、政治、文化およびその他の現象を反映してきた。とりわけ近年の作品では、インドネシア国民として、原住民と共存しながら、民族を分けることなく、ジャワの大地を賛美すると同時に、貧困線上でもがいている多くの人々に対して同情と思いやりを表し、社会の理不尽や不公平を訴えている。顧長福の一首である「無家可帰」は、道路清掃夫の辛苦を描写し

たものである⁵⁷⁾：

灰色の夜空
夕焼け雲もない
暖かで潤んだ瞳で
星がまばたきをしている

鳴ったばかりの
子の刻を示す時計の音
十五夜の月光が
照らす彼の影は
長く長く引っ張られている

狭い道に面する窓は閉められて
一筋の光も漏れてこない

庭の中に舞い落ちる
鉄柵の外の落ち葉

鶏が夜明けを告げる頃
手押し車の中は
道路清掃夫の汗でいっぱいになっていた

(日本語訳：筆者)

インドネシア華文文壇に光がさしはじめたのは、排華事件が起こる少し前の1996年である。謝夢涵⁵⁸⁾、茜茜麗亜とともに『三人行』を出版した袁霓⁵⁹⁾は、詩集の中で、深い味わいを感じさせるいくつかの写実詩を詠んでいる。例えば、「我曾経是一棵大樹」、「椰城的塞車」、「車禍」、「陌生的少女」などである。華人作家の嚴唯真氏⁶⁰⁾は、『三人行』の序章のなかで、「袁霓の詩は現実社会のありさまを直視し、人生を解析している」と評している。「我曾経是一棵大樹」の第4節からは、袁霓の現実社会に対する怒りや辛い気持ちが静かに伝わってくる⁶¹⁾：

過去の歲月 過去のいたわりに
あなたたちが思いをはせることを過分に期待して
いなかった

むしろ
言葉が話せない木彫りの人形にされて
私の家の
だれも注目しない隅に置かれたほうが
捨てられるよりかはずっといい

私は
あなたたちが大切に作る骨董品にはなりたくない
私に ただ黙ったまま
静かに分かち合わせてほしい
あなたたちの喜怒哀楽を

(日本語訳：筆者)

振動する耳が目撃した
一枚一枚の屋根瓦が声のない挽歌を踊る
一つ一つのレンガが望郷の目つきを暗く光らせて
いる

(日本語訳：筆者)

過去からジャカルタは頻繁に水害に襲われていた。茜茜麗亜は、洪水で覆いつくされたこの大都市の水害のありさまを目の当たりにして、感じたままを詠んでいる⁶²⁾：

洪水に覆いつくされたのは
命
感情
風には もはや情もなく
雨には もはやロマンもない

(日本語訳：筆者)

また、茜茜麗亜は詩集『沙浪岸湖的馬』の中の一首「我想告诉你的是」で、生きることの意義について詠んでいる⁶³⁾：

生きることとは
1つ また1つの季節が過ぎ行くのを
待つこと
1人 また1人の男女の旅行客が
山に登って
水辺で遊ぶために
運んであげることのようなものである

(日本語訳：筆者)

茜茜麗亜や袁覓が詠む詩には、大自然が人類に与える災害、そして、貧困生活を送る人民に対して、同情の気持ちが示されているのと同時に、大自然を前に人類はどうするすべもないという感情も表されている。葉竹と北雁⁶⁴⁾は、2004年に共著で『双星集』を出版した。詩集の中には、多くの現実主義的な作品が集められている。例えば「停電断想」, 「我以詩的淚水撫慰流落的幽靈」, 「非典型画帖」, 「一只飄搖的風箏」などである。中には、バリ島の爆破テロによる被害者を追悼するものがある⁶⁵⁾。

靴は持ち主の2本の足を探せないでいる

北雁と葉竹よりも若い謝夢涵の詩作は、婉曲で含蓄があり、繊細なものが多いといわれている一方で、現実社会の側面を反映している。『謝夢涵詩選』に収められた「頹垣」は、ジャカルタ駅の塀の崩壊について詠まれた詩である。高さ3メートルにわたるコンクリート製の新しい塀には、鉄骨が入っておらず、突然の塀の崩壊によって5名が死傷し、中には6ヶ月の乳児が含まれていた⁶⁶⁾：

肩から引っかけられているものは
あなたの傲慢さなのか？
上の世代が遺した
世の移り変わりの激しさが
揺れ動いているのか？

あなたの
豪壮な歴史の一頁が
どうやって
乾いた
血の涙に
成り下ってしまうのだろうか？

行ってしまう人
見送る人
誰が望んで気に留め置くだらう
これは一時の別れなのか？

通り過ぎた彼らだけが
負荷しきれないものを背負わされることになる
は
知る余地もなかった
歳月のおろそかさ
人類の脆弱

まさかこんなに一瞬にして
名前がいても簡単に
記者の手によって
掲載されてしまうことになるなんて

苦しみの
訃報として

(日本語訳：筆者)

上の詩は、塀の崩壊の被害に遭って亡くなった人たちの無念や、無差別に突如として発生した事件への理不尽さを詠んだ詩である。寒川氏は、「駅は多くの人の流れの合流点であり、新しく作られた塀は、本来ならば、傲慢さを感じさせるくらいの進歩の象徴であるべきであった」として、作者があえて「傲慢さ」という語句を使用したと指摘している。まさかその立派で丈夫で傲慢さを感じさせるべき塀が、いきなり倒壊するなんて、死亡者の名が記者によって簡単に報道されるなんて、政府による弔慰金がたった 5 百万ルピア (約 4 万 6 千円) だけだなんて、人々には想像もできなかったことである。作者は、このインドネシアで、国民の生命が雑草のように扱われていることに対して、詩作を通して怒りを表明したのである。

2004 年末、スマトラ北部のアチェを襲った大津波によって、数え切れない数の人々が波にさらわれ、数十万人が家を失った。顧長福は、「母親不再哭泣」の詩を通して、被災した同胞への追悼や同情の気持ちを表した。また彼は、「陳年香檳」の詩では、スラバヤ近辺の新しい油田の爆発で、十数の村の稲田が油に呑み込まれ、人々が亡くなった悲劇を詠んでいる。莎萍の一首「給苦難的垂齊」は、原住民であるアチェの同胞に向けての同情と思いやりを表したものである。この詩は、固い信念があれば、国を再建することができるという意志が感じられる詩である⁶⁷⁾：

津波の後の青い空は依然として真っ青であり
津波の後の大海は依然として凪いでいる
前を向こう、遠くには新しいアチェがある

(日本語訳：筆者)

5. 終わりに

近年、インドネシアの華人は自らの権益を守るために、華人による、あるいは華人が主要メンバーである組織を次々と復活させている。例えば、「インドネシア華裔総会」、「インドネシア百家姓協会」、「インドネシア客属聯誼会」、「インドネシア孔教総会」、「インドネシア中華青年正義聯合会」などが設立されている⁶⁸⁾。こういった組織は、華人の凝集力を強めることや、華人の権益を守ることだけではなく、インドネシ

アと中国との架け橋になり、また、中国語や中国文化を継承、発展させていく力を着実につけている⁶⁹⁾。

一部の組織は、積極的に原住民との距離を縮める努力を行っているのが特徴的である。例えば、「インドネシア百家姓協会」は非常に活動的な組織であり、とりわけ社会福祉面での支援活動に力を入れている。また、若い世代の華人と原住民に対して、民族間の理解を促進することを目的とした講座、セミナー、演説なども頻繁に実施している⁷⁰⁾。アチェで発生した地震に際しても、該会は、学校、病院、マーケット、回教寺院などの修理も行うなど、原住民への積極的な支援を行い注目された。「インドネシア華裔総会」は、華人と原住民との貧富の差を縮めるために、貧困線上にいる原住民に対する支援活動を実施している。例えば、本来なら政府が行うべき道路工事や生貧困者への生活補助などを実施している⁷¹⁾。その他には、「バンドン閩南基金会」は、貧民に対して無料診療を提供し、「バレンバン慈濟基金会」は、貧民への米の無償提供などを実施している。華人組織によるこういった救済および慈善活動は、原住民との共同体意識を高め、原住民の華人に対する偏見を払拭するという目的も含まれている⁷²⁾。

中国語教育についても大きな変化が見られる。インドネシア政府は、小中学校における外国語科目の中に第 2 外国語として中国語を組み入れ、2006 年以降は、インドネシアの全ての公立初級中学および高等中学において、中国語教育が必修科目とされることとなった⁷³⁾。都市部では、小中学校だけではなく、民間の中国語学習機関も数多く出現しており、華人だけではなく、原住民も中国語を学んでいる⁷⁴⁾。現在、インドネシアでは華文の家庭教師が 3 千人以上おり、うち 5 百人がジャカルタに集中している。インドネシア全域では、103 校の正式に登録された華文学校や華文コースが存在している⁷⁵⁾。非常に興味深いことは、中国語教育を受けているのが華人だけに限っていないことである。近年は、原住民の履修者が顕著に増加し、中国語教育の場で、華人と原住民が机を並べて、中国語を学ぶ様子は特別ではなくなっているのである。これは、1950 年代以前、華文が最盛期であった頃とは異なる様相である。

多くのインドネシアの華人が、インドネシアの国籍を選択するようになってから半世紀が過ぎた。現在のインドネシア華文詩歌では、社会のなかでも底辺の生活を強いられている人びとが取り上げられ、インドネシアの壮麗な山河や、原住民と華人の友誼などに関す

る数多くの詩が詠まれている。近年、このような現地意識や、原住民との共同体意識が、詩のなかで特に表現されるようになってきている。

近年、陳冬龍⁷⁶⁾や立万などの華人詩人によって、華文とインドネシア語による詩の相互訳が行われている。相互訳を行うことで、華人と原住民との距離を縮め、隔たりを取り去り、誤解を解くという目的である⁷⁷⁾。1970年代より、インドネシア華人作家や詩人と交流を継続してきた寒川氏は、民族間の理解を深めるためには、この相互訳が重要であると実感し、自身も中国語とインドネシア語による『多巴湖恋歌：寒川華印双語詩選』をインドネシアで出版している。インドネシア語に翻訳された華文学や詩を通して原住民と交流を深めることも、多民族共生を目指す現在のインドネシアには必要なことである。互いに相手を知り、相手を理解し、相手を認めることで、インドネシアの建国理念でもある「国家の統一」の実現につながるのである。

特に、陳冬龍は、インドネシア語と中国語の2言語の相互訳および、原住民と華人の交流の促進に非常に積極的であり、彼の『追尋心靈の選択』（インドネシア語と華語の2言語による詩集）に収録されている「我有一個夢」には、何万人ものインドネシア国民の夢が詠まれている⁷⁸⁾：

私にはひとつの夢がある
それはあなたの夢でもあるはずだ
我々は兄弟姉妹であって
平和に共存できるはずだ

同じ太陽が
私たちを照らしている
同じ大地と水が
私たちを生かしている

(日本語訳：筆者)

この詩は、1998年の排華事件の後、インドネシアが経済危機を乗り越え、成長を見せ始めた2001年に詠まれた詩である。「我々」とはインドネシアに住む人々を指しており、多民族の平和的な共存への願いが込められている。この詩は、現在のインドネシアに住むすべての人々の願いや希望を反映したものであるといえよう。寒川氏は、詩人である朱自清の言葉である「詩は時代を追いかけ、また時代をリードする」を引用しながら、以下のように述べている⁷⁹⁾：

インドネシア華人詩人は、「僑民文学」から、現地意識を次第に強めていった。彼らは詩歌を通して、自己の理想と願望を表現し、時には、その時代の政治意識形態に左右されてきた。文学は、政治の従属品ではない。インドネシア華文詩歌は「インドネシアの色彩」あるいは「独得性」を持っている。

現在、インドネシアの華文詩には、インドネシア社会における各階層の人々や様々な民族の生活に目を向けて、幅広い視野から詠まれたものが非常に多い。そして、詩作からは、かつてのような中国を祖国とする意識は完全に見られなくなっている。また、排華政策が実施されていた時期のように、詩作を通して、華人の置かれた不遇な立場や境遇を過度に強調したり、華人が発することのできない声を代弁したりすることも少なくなっている。現在の華文詩には、民族を超越した「インドネシア国民」としての意識形態が現れ、底辺の生活を余儀なくされている人たちや不幸な事件に巻き込まれた人々に対する同情の気持ちや、社会の不公平が訴えられるなど、現実主義が非常に強く反映されている。特に、上で最後に紹介した「我有一個夢」の詩は、まさに現在の華人の意識形態が反映されている詩であるといえよう。

実は、筆者にとって、1998年の排華事件の衝撃があまりに大きいものであったため、本研究を通して、近年の華文詩作に触れるまでは、華人と原住民との共生は決して容易なものではないと考えていた。共生のためには多大な努力が必要であり、少なくとも、原住民と華人との関係の改善には、長い年月が必要であると考えていた。筆者は、本研究を通して、近年の華文詩に見られる原住民との共生意識や、詩の華文とインドネシア語の相互訳の実施などの新しい動きについて理解を深めるにつれて、上述の考え方を改めるに至った。政府からの働きかけだけではなく、華人作家や詩人たちの草の根のレベルにおいて、このように原住民と華人との相互理解や共生意識が進めば、民族の共生の実現は、想像するよりも早く訪れるのではないかと考えるようになった。

今後、インドネシア華文詩歌は、更に「インドネシアの色彩」および「独得性」を有しながら発展していくであろう。中国語とインドネシア語による華文学や華文詩作などの相互訳が更に進むことによって、更に華人と原住民の相互理解も深まるであろう。その過程で、今後、混血の人々による詩歌や、中国語を学

ぶ原住民による華文詩作も誕生するかもしれない。多民族の相互理解の上での平和的な共生ができてこそ、本当の意味での国家が目指す「インドネシアの統一」の実現につながっていくと考えられる。とはいえ、インドネシアの民族共生の問題は、単に華人と原住民の間の問題だけではない。実際にはもっと複雑である。原住民同士であっても、居住地や宗教などの差異によってその価値観や大きく異なるからだ。インドネシアにおける多民族の平和的な共生の実現までは、長い道のりではあるものの、現在の華文詩作にみられる華人の国家意識の変容をみていると、現在がその第一歩であると深く感じるのである。

謝辞

この研究を進めるにあたって、シンガポール華人作家で詩人の寒川氏から、インドネシアの華文詩に関する資料、情報、助言などを多くいただきました。ここにあわせて、寒川氏には心からの感謝の気持ちを表します。

参考文献・資料 (漢語拼音順)

- 鄧仕超「印尼華人的政治參與」,『東南亞華人的政治參與』,中國華僑出版社(北京),2004年。
- 郭陸興,汪峰,李天榮編『印尼暴亂與非華心聲』,慈橋基金會(フィリピン),2001年。
- 郭婕妤『印尼族際關係中華人的困境—從文化視角所作的探索』,廈門大學修士論文,2007年5月。
- 黃麗嫦「中國與印尼關係發展中軟實力的提升及華僑華人的推動作用」,暨南大學修士論文,2010年6月8日。
- 賈都強「轉型進程中的印尼華人社會:現狀,問題和前景」,『當代亞太』,2006年第1期。
- 廖建裕「印尼總統選舉與印尼華人」,『新加坡聯合早報』,2009年7月7日。
- 羅綺萍「中國駐印尼大使盧樹民:印尼災區並無排華」,『21世紀經濟』,2005年01月10日。
- 潘翎編『海外華人百科全書』,三聯書店(香港),1998年。
- 蘇永延「印華文學復蘇以來發展管窺」<http://www.yinhuazuoxie.com/huodong/suynyanzuoxieshizhounian.html>
- 楊曉強「印尼原住民華人觀淺論」,『東南亞研究』,1999年第1期。
- 「印尼概況」,『新華網』,http://news.xinhuanet.com/ziliao/2002-06/18/content_445743_1.htm。
- 溫北炎「印尼華人融入當地主流社會的現狀,挑戰和發展趨勢」,『東南亞研究』,2008年第4期。
- 『千島日報』,2003年10月8日。(溫北炎,鄭一省『後蘇哈托時期的印度尼西亞』の273頁から引用。)
- 文峰「文化適應的失敗—印尼華人困境再思考」,『東南亞』,2001年第2期。
- 溫憲「中國印民永做好夥伴」,『人民日報海外版』,2005年04月26日。
- 許梅,黃麗嫦「試論華僑華人在推動中國與印尼關係發展中的獨特作用」,『八桂僑刊』,2009年9月第3期。

- 楊陽「二戰後印尼政府的華人政策與華人參政」,『東南學術』,2003年第2期。
- 翟景升「印尼華人不再需國籍證」,『世界報導』,2002年06月22日第3版。
- 張敏,李士君「印尼將創立三十五年來首家華文學校」,『檢察日報』,2000年6月26日8版。
- 張霜「印尼:華文教育開創少數民族教育歷史」,『中國民族報』,2007年9月14日第3版。
- 鄒雲保「瓦西德執政後的印尼華人」,『八桂僑刊』,2001年2期。

〈寒川氏から提供を受けた資料の出所(一部は出版社および出版年不明,漢語拼音順)〉

- 北雁,葉竹『双星集:北雁・葉竹詩選』,島嶼文化社(シンガポール),2004年。
- 陳冬龍『追尋心靈的選輯』。
- 馮世才『秋實』,獲益出版事業(香港),1999年。
- 馮世才『遙寄』,獲益出版事業(香港),2000年。
- 顧長福『顧長福詩集1』,獲益出版事業(香港),2007年。
- 顧長福『顧長福詩集2』,獲益出版事業(香港),2007年。
- 寒川(暁星:インドネシア語訳)『多巴湖恋歌:寒川華印双語詩選』,印華作協(インドネシア),2008年。
- 黃東平『僑風』。
- 黃東平『僑風二集』。
- 犁青『艱苦成長中的印度尼西亞華文文學』。
- 犁青『印度尼西亞的 laughter 和 泪影』。
- 廖建裕『現段階的印尼華人族群』(新加坡国立大学中文系:東南亞華人叢書7),八方文化企業公司(シンガポール),2002年。
- 明芳『相約在山城』,印華作協策画出版社(インドネシア),2001年。
- 慕・阿敏『淺談印尼華文文學的現代及其發展方向』。
- 莎萍『等待』,印華作協策画出版社(インドネシア),2002年。
- 莎萍『感謝你生活』,印華作協策画出版社(インドネシア),2004年。
- 莎萍『茶的短章』。
- 莎萍『感情的河』,印華作協策画出版社(インドネシア),2008年。
- 楊怡『從新華文壇論及印華文學』,新加坡文芸協會(シンガポール),2003年。
- 茜茜麗亞『只為了一個承諾』,獲益出版公司(香港),2000年。
- 茜茜麗亞,袁覺,謝夢涵『三人行』,1996年。
- 廈門大學東南亞華文文學研究中心『當代東南亞華文文學多面觀』。
- 謝夢涵『謝夢涵詩選』,島嶼文化社(シンガポール),2007年。
- 嚴唯真『試談印華文藝的性質及其走向』。
- 柔密歐・鄭『躍起』,島嶼文化社(シンガポール),1979年。

注

- 1) 潘翎編『海外華人百科全書』,香港:三聯書店,1998

- 年, 151 頁。
- 2) 1919 年 5 月 4 日, 北京で起こった反帝国主義運動。第一次大戦後のパリ講和会議で, 山東半島の利権返還などの中国の要求が通らず, また, 日本の対華 21 カ条要求に対する反発から, 学生デモを契機として全国的規模に発展, 中華民国政府はベルサイユ条約調印を拒否せざるをえなくなった。
 - 3) 寒川氏から筆者への情報提供による。
 - 4) 廖建裕「印尼總統選舉與印尼華人」, 『新加坡聯合早報』, 2009 年 7 月 7 日。
 - 5) 廖建裕「印尼總統選舉與印尼華人」, 『新加坡聯合早報』, 2009 年 7 月 7 日。
 - 6) 潘翎編『海外華人百科全書』, 香港: 三聯書店, 1998 年, 152 頁。
 - 7) 潘翎編『海外華人百科全書』, 香港: 三聯書店, 1998 年, 158 頁。
 - 8) 寒川氏から筆者への情報提供による。
 - 9) 寒川氏から筆者への情報提供による。
 - 10) 祖籍は福建省金門。1923 年, インドネシア東カリマントンに生まれる。華文学校にて正規の教育を受けた時期は短かったが, インドネシアおよび東南アジアの華文文壇は著名な老作家の 1 人である。1990 年には中国汕頭市「海力杯」テレビ脚本栄誉賞を受賞。1996 年には第 1 回アセアン華文文学賞を受賞。著書には, 『僑歌三部曲』, 『遠離故国の人們』, 『頭家与咕喱』などがある。
 - 11) 寒川氏から筆者への情報提供による。
 - 12) 寒川氏から筆者への情報提供による。
 - 13) 寒川氏から筆者への情報提供による。
 - 14) 本名は李福源, 改名して謝聰明となる。1933 年, 福建省安溪に生まれる。11 歳になり詩作を始める。貧困のために, 1947 年に香港に移り職業を転々とし, 1948 年にインドネシアに教師として赴任する。出版した詩集は『苦難の僑村』, 『瓜紅時節』, 『翡翠帶上的歌声』, 『紅溪の血涙』, 『踏浪帰来』, 『碧青山水』, 『台湾詩情』などの 20 部あまりに及ぶ。詩人として国内外でも名が知られており, 後年はインドネシアの企業家として成功, その後, 香港に移住している。
 - 15) 寒川氏から筆者への情報提供による。
 - 16) 寒川氏から筆者への情報提供による。
 - 17) 「印尼概況」, 『新華網』, http://news.xinhuanet.com/ziliao/2002-06/18/content_445743_1.htm。
 - 18) 郭陸興, 汪峰, 李天榮編『印尼暴亂與菲華心聲』, 菲律賓: 慈橋基金會, 2001 年, 190 頁。
 - 19) 楊曉強「印尼原住民華人觀淺論」, 『東南亞研究』, 1999 年第 1 期, 59 頁。
 - 20) 本名は徐小民。1947 年, インドネシアのバンドンに生まれる。初級中学在学中から新聞などに投稿を始める。作品は, 詩, 散文, 散文詩を主とする。インドネシア女性作家の中ではベテランとしてよく知られている。
 - 21) 寒川氏から筆者への情報提供による。
 - 22) 華文の出版物が規制されていた当時, 公的に発行が認められていた華字紙。
 - 23) 寒川氏から筆者への情報提供による。
 - 24) 寒川氏から筆者への情報提供による。
 - 25) 1924 年, インドネシアのリアウ群島にて生まれる。11 歳で詩作を開始し, 多くの現代派, 愛情豊かな詩, 散文詩などを発表した。作品は『印度尼西亞日報』のみならず, 香港やシンガポールの刊行物にも掲載されることが多かった。2 冊の詩集と散文詩集を出版しており, 散文も多く書いている。1995 年死去。
 - 26) 1938 年, インドネシアのスマトラ島パレンバンにて生まれる。1960 年代に新聞紙上で作品の発表を始める。主な作品は詩であるが, エッセイ, 散文, 短編小説なども多く書いている。兼職として翻訳も行っていった。詩集『明朗的日子』と『秋実』を出版している。ベテラン作家として知られる。2000 年死去。
 - 27) 寒川氏から筆者への情報提供による。
 - 28) パンチャシラーインドネシアの建国 5 原則とは, 全知全能の神への信仰, 公正にして開明的な人道主義, インドネシアの統一, 協議と代議制による民主主義, インドネシア国民に対する社会主義のことである。パンチャシラ 5 原則は, 1945 年 6 月 1 日の「独立準備委員会」の席上, スカルノが独立インドネシア国家の理念として初めて公式に提示し, 同年 8 月 17 日発布の共和国憲法の前文に記載された。
 - 29) 寒川氏から筆者への情報提供による。
 - 30) 寒川氏から筆者への情報提供による。
 - 31) インドネシアのスラバヤ出身の華人詩人。当局の厳しい排華政策や, インドネシア国内の社会問題について詠んだ現実的な作品が多い。また, インドネシアに対する郷土愛を示す作品も数多い。
 - 32) 寒川氏から筆者への情報提供による。
 - 33) 寒川氏から筆者への情報提供による。
 - 34) 溫北炎「印尼華人融入當地主流社會的現狀, 挑戰和發展趨勢」, 『東南亞研究』, 2008 年第 4 期, 68 頁。
 - 35) 本名は葉平義。1961 年にインドネシアのリアウ群島に生まれる。1980 年に現代詩の創作を開始する。
 - 36) 寒川氏から筆者への情報提供による。
 - 37) 本名は陳喜生。1936 年生まれ。初級中学在学中に作品を書き始める。作品には, 小説, 散文, 詩歌がある。1956 年以降は多くの詩を書いている。1958 年の高校卒業後, 執筆活動を続ける。燕南婦などのペンネームで『印度尼西亞日報』に詩作を発表。
 - 38) 寒川氏から筆者への情報提供による。
 - 39) 本名は金愛欽。祖籍は福建省福清。インドネシアのジャワ中部の都市ベカロンガンに生まれる。家庭事情で初級中学を退学。作品は, 小説, 散文, 詩歌が主で, 『印度尼西亞日報』および国外の新聞や雑誌に投稿している。文学活動に熱心で, 東南アジアでも知名度が高い。1996 年に, 謝夢涵, 袁覓と共著で, インドネシアで最初の女性詩人による詩集『三人行』を出版した。
 - 40) 寒川氏から筆者への情報提供による。
 - 41) 寒川氏から筆者への情報提供による。
 - 42) 本名は黄兆銘。1946 年にインドネシアに生まれる。1956 年にスラバヤの中学を卒業。初級中学在学中から文学の創作を始め, 散文, 詩歌を多く書いている。

- 43) 蘇永延「印華文學復蘇以來發展管窺」<http://www.yinhuazuoxie.com/huodong/suyngyanzuoxieshizhounian.html>
- 44) 鄒雲保「瓦西德執政後的印尼華人」,『八桂僑刊』,2001年2期,35頁。
- 45) 張敏,李士君「印尼將創立三十五年來首家華文學校」,『檢察日報』,2000年6月26日,8版。
- 46) 郭婕妤「印尼族際關係中華人的困境－從文化視角所作的探索」(廈門大學修士論文),2007年5月,47-48頁。
- 47) 文峰「文化適應的失敗－印尼華人困境再思考」,『東南亞』,2001年第2期。
- 48) 溫憲「中國印民永做好夥伴」,『人民日報海外版』,2005年04月26日。
- 49) 賈都強「轉型進程中的印尼華人社會：現狀,問題和前景」,『當代亞太』,2006年第1期,52頁。
- 50) 溫北炎「印尼華人融入當地主流社會的現狀,挑戰和發展趨勢」,『東南亞研究』,2008年第4期,69頁。
- 51) 賈都強「轉型進程中的印尼華人社會：現狀,問題與前景」,『當代亞太』,2006年第1期,52頁。
- 52) 翟景升「印尼華人不再需國籍證」,『世界報導』,2002年06月22日,第3版。
- 53) 溫憲「中國印民永做好夥伴」,『人民日報海外版』,2005年04月26日。
- 54) 同上。
- 55) 羅綺萍「中國駐印尼大使盧樹民：印尼災區並無排華」,『21世紀經濟』,2005年01月10日。
- 56) 蘇永延「印華文學復蘇以來發展管窺」<http://www.yinhuazuoxie.com/huodong/suyngyanzuoxieshizhounian.html>
- 57) 寒川氏から筆者への情報提供による。
- 58) 本名は余奮勉。祖籍は福建省南安。1960年にインドネシアのジャカルタにて生まれる。就学年齢時になると華文学校が閉校となったため、正規の華文学校では学んでいない。1975年に断続的に詩や小説を書き始める。作品は『印度尼西亞日報』,シンガポールや香港などの新聞や雑誌にて発表していた。近年の詩作や小説では、現代意識が感じられるものが多い。1996年に、茜茜麗亞と袁寬と共著で、インドネシアで最初の女性による詩集『三人行』を出版。
- 59) 本名は葉麗珍。インドネシアのジャカルタにて生まれる。小学校5年時に華文学校が閉校となる。1972年に小説,散文,詩などを書き始め,『印度尼西亞日報』に投稿する。1978年に筆を置くが,1987年に執筆を再開して現在に至る。小説の執筆に長けており,1970年代に活躍した作家の1人として知られている。1996年に,茜茜麗亞と謝夢涵と共著で,インドネシアで最初の女性による詩集『三人行』を出版。1997年に短篇小説集『花夢』を出版。現在はインドネシア華文作家協会主席。
- 60) 本名は林志強。1933年にインドネシアのバンドンにて生まれる。華文高級中学を卒業,廈門大学中文系中退。15,6歳の時に書作を始める。『火炬報』や『椰島文芸特刊』の編集に携わっていた。教師,公共バスの運転手,商売人などを経て,現在再び教鞭を執り,華語を推進している。近年は,香港の作家仲間とともに,『綠島』(純文芸雑誌)および『綠島文芸叢書』の編纂を行っている。インドネシア華文壇では著名な作家である。著書には『李清照詩詞今訳』および『嚴唯真詩文選』がある。
- 61) 寒川氏から筆者への情報提供による。
- 62) 寒川氏から筆者への情報提供による。
- 63) 寒川氏から筆者への情報提供による。
- 64) 本名は麦偉成。1956年にインドネシアのリアウ省にて生まれる。新詩と短編小説の執筆に長けている。作品は『印度尼西亞日報』およびシンガポールの新聞や雑誌に発表している。
- 65) 寒川氏から筆者への情報提供による。
- 66) 寒川氏から筆者への情報提供による。
- 67) 寒川氏から筆者への情報提供による。
- 68) 楊陽「二戰後印尼政府的華人政策與華人參政」,『東南亞學術』,2003年第2期。
- 69) 許梅,黃麗嫦「試論華僑華人在推動中國與印尼關係發展中的獨特作用」,『八桂僑刊』,2009年9月第3期,36頁。
- 70) 賈都強「轉型進程中的印尼華人社會：現狀,問題和前景」,『當代亞太』,2006年第1期,53頁。
- 71) 鄧仕超「印尼華人的政治參與」,『東南亞華人的政治參與』,北京：中國華僑出版社,2004年,235頁。
- 72) 『千島日報』,2003年10月8日。(溫北炎,鄭一省『後蘇哈托時期的印度尼西亞』,273頁にて引用。)
- 73) 黃麗嫦「中國與印尼關係發展中軟實力的提升及華僑華人的推動作用」(暨南大學修士論文),2010年6月8日,36頁。
- 74) 張霜「印尼：華文教育開創少數民族教育歷史」,『中國民族報』,2007年9月14日,第3版。
- 75) 許梅,黃麗嫦「試論華僑華人在推動中國與印尼關係發展中的獨特作用」,『八桂僑刊』,2009年9月第3期,36頁。
- 76) 1946年にインドネシアのウルバンゲンにて生まれる。1995年に商業界を退き,文芸界での仕事に専念している。2冊の個人詩集と5部の翻訳本シリーズを出版している。現在は,文学作品の翻訳と文化交流に熱心に従事し,「インドネシア文学社」の理事をつとめている。
- 77) 寒川氏から筆者への情報提供による。
- 78) 寒川氏から筆者への情報提供による。
- 79) 寒川氏から筆者への情報提供による。